

# 御土はんのう

第33号

飯能二丁目の山車(飯能市有形民俗文化財)

平成22年度から3年計画で復原修復工事を実施、このほど竣工報告を開催しました。老朽化した躯体を安全に曳行できるよう解体・部分取換えを行うとともに、建造当初(文久・明治初・1860年代)の「八王子型人形山車」として復原・整備をはかり、山車人形・神功皇后が復活しました。今年11月3日開催予定の『飯能まつり』で、その勇姿を目にすることができま

(小槻成克)



## 目次

◆市指定有形文化財(古く寺資料)

町回家阿弥陀三尊唐中講供養図像振舞について

坂口和子 2

◆つくば市の文化財報告.....岡根貴志 3

◆随筆 おちんばら文化展.....吉田敏子 4

◆山岳信仰と修験

～高山不動を中心～.....大野邦弘 5

◆聖徳太子伝説と法隆寺.....須田 勉 6

◆平成24年度総会講演会.....清水保夫 8

◆編集後記.....坂口和子 8

飯能市有形民俗文化財  
飯能二丁目  
鎮歌祝和会

### 市指定有形文化財(考古史料)

### 町田家阿弥陀三尊庚申供養画像板碑について

坂口和子

平成24年度に市指定文化財に登録された板碑(拓本参照)をご紹介いたします。

埼玉県は板碑(板石塔婆とも)が多く遺されています。板碑研究者に注目されています。板碑研究者、愛好者の間で、板碑はよく知られておりませんが、個人所有のものが公開されておりませんか？

知る人は少ないでしょう。飯能市上名栗に存在するこの板碑が飯能市の誇る石造文化財として未長く保存、保管されることを願って、教育委員会の諮問に応じて、文化財保護審議委員会が調査の上登録を決めたものです。

・板碑とは  
板碑は中世(鎌倉・南北朝・室町・戦国時代まで)に造られた石塔の塔婆の一種で ①死者の菩提を弔う追善供養 ②生前に死後の養生安楽や仏の功徳を願う逆修供養 ③多くの人が集まって極楽往生を願う作善供養(月待・庚申待など)に分けられます。関東では長瀬や小川町などに産出する緑泥片岩(秩父青石とも)を使い、武威型板碑とよばれています。

・阿弥陀三尊画像について  
板面の中央に光背のある阿弥陀

如来像、両脇に観音菩薩と勢至菩薩が彫られ、下方に花瓶・香炉・燭台の三具足を置く前机がありまた蓋が刻されている調和のとれた美しい図像です。

板碑の大きさは高さ120センチ・中40センチ・厚さ35センチ・緑泥片岩製です。

・銘文について  
板碑に刻されている文字を銘文といいますが、造られた年月を紀年銘といい、かならず刻されていますが、この板碑はその部分が剥離していて正確に読みとることが不可能ですが「かし□正元□」と読める文字が残っているため「正」のつく元号は康正元年(1455)・寛正元年(1460)・文正元年(1466)に絞られます。また造立にかかわった人の名(交名)がはつきりと刻され、法名5人俗名14人を含む19人がわかります。

・信仰内容について  
碑面右端に「庚申供養」とあります。つまり庚申信仰の仲間が集まって建てたことがわかります。追善供養ではなく、③の作善供養であり、民間信仰の一つである庚申信仰がこの時代盛んになっていた証しともいえるでしょう。庚申待・庚申講・守庚申などとかかれた板碑を特に庚申板碑と呼んでいます。今まで庚申板碑の最古とされているいた実相寺(川口市)の文明三年(1471)銘より町田家のものは数年さかのぼりますので庚申板碑の最古ということになるでしょう。

以上簡単な説明をいたしました。文化財指定の理由は次のようです。

・板碑としてはほぼ完形であること

・阿弥陀三尊画像板碑は飯能唯一であること(破片二基あり)

・庚申板碑としては最古であること。飯能市の板碑調査では約千基記録されていますが、庚申板碑はありません。

町田家の板碑がどのような経緯を辿って現在があるのか、解明する資料はありませんが、ほぼ50年の歲月(風雪を耐え抜いてきたこ

とに感謝しないではいられません。遠いご先祖の生きた証しを21世紀の私たちが大事に見守っていく責務があると思います。

・庚申信仰について  
庚申待は干支の組合わせで60日に1度巡ってくる「庚申」の日。その夜を眠らざらずにすくして健康長寿を願う信仰です。中国の道教によると人間の体内にいる三尸という虫が庚申の晩に体内から抜け出して、天帝にその人の罪科を告げて早死させてしまおうというもので、その晩は身を慎んで寝ずに夜を明けさせば三尸の虫が抜け取れないので長命が保たれ、という信仰で古くから行われてきました。江戸時代を通じて特に盛んになりました。町田家は沢山建てられています。戦前までは庚申講で信仰行事をする土地は多かったのでありますが、近年は稀になりました。(会長)

た証しとともいえるでしょう。庚申待・庚申講・守庚申などとかかれた板碑を特に庚申板碑と呼んでいます。今まで庚申板碑の最古とされているいた実相寺(川口市)の文明三年(1471)銘より町田家のものは数年さかのぼりますので庚申板碑の最古ということになるでしょう。



た証しともいえるでしょう。庚申待・庚申講・守庚申などとかかれた板碑を特に庚申板碑と呼んでいます。今まで庚申板碑の最古とされているいた実相寺(川口市)の文明三年(1471)銘より町田家のものは数年さかのぼりますので庚申板碑の最古ということになるでしょう。

- (願所) (天竺) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集
- (願所) 阿比花畑集

名葉村史研究 名葉郷より転載

## つくば市の文化財探訪

関根貴志

平成24年の見学会は、8月24日(金)茨城県つくば市となった。参加者18名。7時30分にマイクロボスで飯能駅を出発。案内講師は、元筑波町町長・井坂敦実氏と佐藤不二也氏(日本石仏協合理事)。

## ①筑波山神社

入口の石階段を登ると天狗兜の藤田小四郎の像がある。ここで当社の説明を受けて。

当社は、徳一上人が延暦年間(知足院中)禪寺として開山した神仏習合の寺院である。江戸期になると、筑波山は江戸城から見て北東の方向に当たるので鬼門鎮護の寺院として幕府から庇護される。寛永10年に家光が社殿を寄進。これは日光東照宮より4年早いという。(井坂先生は日光より4年早い、ということもあるが、社殿を造った職人が「三猿」があるが、社殿を造った職人がこの後に日光東照宮を手がけたということである。

その後、明治の神仏分離令により中禪寺は廃され、神社としての転換を余儀なくされた。このとき大御堂や三重の塔を含め、多くの堂宇・仏像が破却されたとのこと。徳一の墓所も境内の最奥部にあるが、これも破壊されてしまったらしい。本尊の千手観音はなんとか飯堂に安置されることになったが、飯堂三十三カ所の第25番札所としては

欠番の状態となった。ようやく昭和5年に再興されたものの、昭和13年の山津波で堂宇ごと埋没。幸い無傷で掘り出され、その後は民家に安置されていた。昭和35年に大御堂が建立され復帰した。

また銅製の大仏も霞ヶ浦に捨てられ、今は吾明の護国寺にあるという。

## ②つくば科学万博記念館

先へ進むと左手につくば科学万博記念館がある。この建物はもともと山階宮殿下が筑波山測候所に行く際の休憩所として使われていた。昨年の震災の影響で建物の一部が崩れていた。

## ③御神橋



正面石段の前に御神橋がある。これは家光が寄進したものがそのまま遺っている。毎年四月と十一月の一日に行われる御座替り祭の時に、御輿がこの

御神橋を通るといふ。(御神橋が聞かれるものこの2回だけ)

## ④随神門

もとは仁王門だったもの。仁王は追い出されて今は別の寺へ移されたらしい。今は徳建命(ヤマトタケル)と豊木入日子命(トヨキイリヒコノミコト)が納まっている。

## ⑤厳島神社

祭神は宗像三女神の市杵島姫神である。寛永10年の建立で、家光から寄進されたもの。

社殿は檜皮で葺かれ、また彫刻が施されている。近年補修工事が為されており、葺き替えには1500万円ほど掛かったらしい。井坂先生は、厳島はつくばの語源に関係があるのではと話していた。

## ⑥春日神社と日枝神社

当二社も寛永10年の建立で、家光から寄進されたものらしい。それぞれが同一形状で、また拝殿は両社共有の割拝殿形式となっている、珍しいものである。

## ⑦楠木正勝の墓

正勝は楠木正成の孫にあたる人物で、虚無僧の祖ともいわれる。もともとは無僧発祥の時代と合わないため、これは伝承と考えたほうが良いとのこと。また正勝の墓は奈良十津川や各地にあるため、ここに正勝本人が眠っているかどうかも分からない。確かなことはこの墓の近くの千手次仁普化宗の古通

寺があったことである。この古通寺は先にも書いた昭和13年の山津波で流されてしまった。

## ⑧愛宕神社

正勝の墓のそばに愛宕神社があり、当日は祭礼の日だったらしい。神社の関係者の方達が行き来し、また近隣住民により祭りの準備が進んでいた。

## ⑨光善上人五輪塔

隨身門の左手奥に、大きな五輪塔がある。光善上人は江戸期の軟宣ガマの油薬師の人とされている。上人は中禪寺の住職でもあり、大坂の陣に従軍し、膏華を使っても怪我人の手当をしたという言い伝えが残っている。

## ⑩児玉党の由来

昼食はつくば市北条のニュー高根で頂いた。

この時、井坂先生が埼玉と筑波地方の関連性ということで、武威七党の一つである児玉党について話された。曰く「金鎖神社鎮座之由来記」記載の「大部氏」は「大部氏」の誤記であり、この大部は「続日本紀」に記載のある常陸國筑波郡人の大部氏であろうとのこと。大部氏が有道宿禰の姓を賜り、やがて子孫が児玉党を称する。もと由來記には書かれているが、つまりこの説によると児玉党の先祖は筑波地方出身ということになる。

## ⑪日向庵寺跡

北条商店街の駐車場にバスを止めて庵寺跡に向かう。この遺跡は町営園地

建設時に発見されたもので、礎石や長方形の盛り土を見ることができ、宇治の平等院鳳凰堂と同様の左右対称の寺院様式で、全国でも3つしか類例のない珍しいものらしい。建立者は常陸平氏の嫡流である多氣氏と言われている。この多氣氏は、この後に向かう小田城の支配者小田氏によって没落させられる。

また北条地区には5月に襲った竜巻の被害があらこちに残っていた。

### ⑫平沢官街遺跡

北条大池の蓮の群生を右手に見ながら進むと遺跡に着く。案内所で紹介の映像を見てから向かう。緩やかな傾斜のある敷地は芝で覆われ、靴を脱いで歩きたくなくなるくらいよく整備されていた。

この場所がかつて奈良・平安期時代にかけて常陸国筑波郡の郡役所があったとされる遺跡で、果実住宅園地が建てられるはずだったところを井坂先生が中心となって保存運動が起り、国指定の史跡として保存されることになったもの。今は史跡公園として整備され、高床式の校倉・土倉・板倉を当時の建築様式で復元している。このうち校倉と土倉を見学。

校倉は木製で、現存する校倉を参考に復元したそうである。外気を遮断するよう隙間なく木材を組んである。そのため外は炎天下だが、中は涼しくまたよく暗だった。倉の鍵は鉄製で、現代のウェストポーチの止め具と同じような特殊な仕組みになっている。何人か鍵の解錠・施錠を試させてもらった。

土倉は左右が倉、中央部が開放になっている双倉という様式で、復元に際しては法隆寺に現存している倉を参考にしたそうである。また遺跡から瓦の出土が少ないため、屋根は茅葺になっている。中央部は風通しがよく、当地区の田園風景がよく見えた。



平沢官街

### ⑬石造灯笼

井坂先生より周辺の文化財について何点か説明いただいた。1か所だけ、長久寺にある石造灯笼を見ることになった。この石灯笼は鎌倉中期作で、類例の

ものとしては関東最古の遺品であり、また鎌倉地方にすら遺例が無い貴重なものだというのだ。

史的経緯としては、鎌倉期に小田氏が奈良西大寺の忍性を三村山清冷院極楽寺に迎え、以後十年にわたりこの地は関東における律宗布教の拠点であったらしく、この灯笼もその頃に奈良西大寺系の石工によって作られたと考えられている。極楽寺からいつごろ長久寺に移されたかは不明である。

### ⑭小田城跡

田筑波鉄道の常陸小田駅跡にバスを停めて城跡に向かう。ここは鎌倉から戦国の数百年にわたる小田氏の居城であり、小田氏没落後は佐竹氏勢力下にあった。佐竹氏の秋田移封で廢城となるのだが、何度か拡張を繰り返した結果、広大な平城になったらしい。

資料写真を見ると現在宅地となっている地域も広く含まれている。その区域を対角線上に鉄道跡が通っており、舗装されて自転車道として利用されている。夏草に覆われて一見造成中の土地のようだが、史跡公園として整備中とのこと。

以上で見学は終わり、案内してくださった井坂さん・佐藤さんと土浦駅でお別れする。酷暑であったが無事に飯能へ午後7時ごろ到着した。

筑波は古代から明治にかけて1日ではとても回り切れないほどの史跡があり、一つ一つが日本史の出来事につながっている。いずれまた訪れたいと感じた。勉強になるよい見学会であった。(会員)

### 〈隨筆〉

おちやあぶち文化展

吉田敏子

\*\*\*\*\*

11月9日から3日間、「おちやあぶち文化展」が開かれ、友人と出かけた。

開催は4回めだが、今年から如井自治会の事業に組み込まれ、実行委員会が中心になって行なわれた。

「おちやあぶち」とは、会場となった如井自治会館前の、つづし山・刈場坂峠・正丸峠方面などから流れて来る高麗川と伊豆が岳・天目指峠・子の権現などから流れて来る久通川が合流する所にある淵の名である。昔から誰言うともなくそう呼ばれていた「川が落ち合う場所にある淵」が「落ち合い淵、落ちやあ淵」となったらいい。

今でこそ水量も少なくなり、浅くなってしまうたが、昔は青々と深い豊かな水を湛えた深い淵だったそうだ。32歳のNさんの話では、水車があり、対岸に渡る木の橋があったそうだ。魚が沢山いて、子ども達の賑やかな川遊びの場所だった。

## 山岳信仰と修験

〔高山不動を中心〕

大野邦弘

平成24年、飯能市郷土館において「山上の霊山 一子ノ権現・竹寺・高山不動・岩殿観音」の特別展が開催され、飯能の山岳信仰の概要が発表されました。山岳信仰は、修験道と深く関わっています。ここでは、高山不動を中心にして記します。

## 一、山岳信仰とは

古代の人びとは、高い山には、天から神が降りてきて住み、その山全体を所有支配してきたと考えられ、山そのものを神聖視するようになりまし。また山には、自然神のほか、祖霊が集まるものと考えられ、祖霊の最大役目は、子孫の生活を守ってくれるといわれ、ことに弥生時代以降は、稲作を見守ってくれと信じられていました。

祖霊は、冬には山にこもって「山の神」となり、春には、里の終り収穫がすむと響応を受け再び山に帰るとされてきました。飯能地方の山岳信仰は、飯能日高、越生の平坦地から望まれ

る山霊地として古代から開かれました。

## 二、修験道との関わり

子ノ権現・竹寺・高山不動・岩殿観音は、それぞれ一千年の歴史を有しており、修験道との関わりが伺われます。

特に、高山不動は深いものがあります。

関東三大不動尊といわれている高山不動と天台宗関東別院という慈光寺(都幾川)は、格式のある山岳寺院であり、古代は密接な関係の大本院であったと思われ、ここでは、『新編武蔵風土記稿』(19世紀末以下『新記』)により、高山不動と近在の寺院との関わりを記します。

## 『新記』高山村の項に

〔前略〕此山の頂に不動堂及び諸堂ありて、其あたりに社僧祝給御師及農民等併て四十軒あり、内御師のて百姓を兼ねるもの二十軒、この余は往々に散在す、御師は近里遠郷までも配快せる生業の資とす(以下略)

不動堂ほか、諸堂があり、40軒が散在し、高山村を形成していたことがわかります。

## 続いて

・常楽院 高貴山と号す、不動明王の別当なり、御朱印地の内にあり、新義真言宗、京都醍醐三宝院の末なり；

・延学院 御朱印地の内にあり、

祝給にて是は本山修験、入間郡越生郷山本坊配下となり、…常楽院は、山号を高貴山と称し、不動明王の寺務を統括する別当とされています。また延学院は、越生の山本坊の配下と記されています。「三宝院」と「山本坊」の関わりが重要と考えます。

## 加えて『新記』に

## 五大明王御影板一枚

入間郡越生龍穩寺開山無極禪師、長祿己卯仲秋当山に参籠ありて大願成就の後、彫刻して奉納すと云、…長祿己卯の年は1459年です。

そして『新記』の龍穩寺の項には

…又秩父郡高山の不動は、当寺の奥院と称す、今も住僧入院の後必ず高山へ参詣す…

このように、越生の龍穩寺との関わり、そして、高山不動は龍穩寺の奥之院と伝えられているゆえんです。

龍穩寺は、太田道真、道灌の墓があり、無極禪師が開山とされていますが、それ以前は山岳仏教として開かれ、山伏や修験道の行者によって保たれていたとされています。

また、山本坊は、室町時代、山本坊宗円(1413没)が、越生黒山に熊野神社を開き、関東熊野霊場として、修験道場

会場は数年前に新しく建て直され、せっかくから地域の方々のために有効に使いたいと「文化展」を始めたとも聞いている。

今年の実行委員会からいただいた来場者へのお礼状の中に「川の合流場所になんで、人と人との集まりを持ちたいという考えのもとに文化展が始まりました」とあり、また

「畑井の地名唄の中に 華師さまから あの 中如すぎてよ

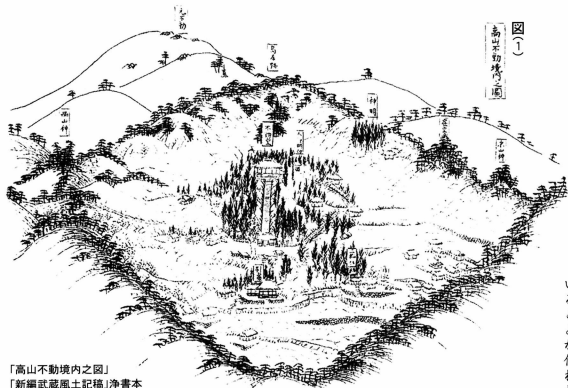
ここは畑井の サイノ サイノ サイノ

ユートピア…」

と唄われていますが、そのユートピアをめざして努力し続けていきたいと思えます。」

とある。出品は畑井に住む人と、この地にある高齢者施設に通所している人から寄せられ、年々数が増えているそう。見に来る人も多く、今年は3日間でも多くだったという。

陶芸・絵画・写真・手工芸品・入選した標語・書・昔あったお祭りの「かさばこ」のミニチュア。現在のお祭りの梵天の模写・流木を利用し



「高山不動境内之図」  
「新編武蔵風土記稿」浄書本

図①  
高山不動境内

「山本坊」を整備し、黒山三滝を拠点としていました。天狗滝裏の太平山には、崇円の墓があり、その脇には、修験の開祖役小角の巨大な石像があります。

山本坊は、江戸時代初期には西戸村（現毛呂山町）へ移りましたが、入間、比企、秩父郡と常陸、越後の一部を配下し持つ一大勢力を有していたと伝えられ、高山不動に大きな影響を与えていることが伺われます。

図①は「新記」に記載されている図ですが、このあと、文政13年（1830）に再び火災にあい現在の姿となっています。古代の高山不動はどのような姿であったのかはわかりませんが、近隣の寺院との密接な関係を保ちながら修験の山として多くの信者をあつめたこの地方の山岳信仰のメッカであったのであ

（副金彦）

### 聖徳太子伝説と法隆寺

須田 勉

はじめに

法隆寺（西院伽藍）は、世界最古の木造建築として世界遺産リストに登録され、日本が世界に誇る文化財として、研究の蓄積も多い。ところが、研究が進めば進むほど寺の謎は深まるばかりで、一向に解決の目途がたたない。さらにそこには、最近の研究で問題があらわれていて、聖徳太子の存在が絡んでいるので、ここでは余計に複雑である。

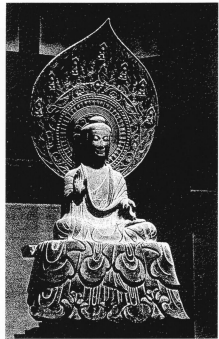
#### 1 法隆寺は焼失したのか

「日本書紀」天智天皇9年（670）

夏4月30日条によると、法隆寺に落雷があり、一屋もなく焼けたという。この記述をめぐり、明治時代から長い間、建築史学や文献史学者の間で法隆寺再建・非再建論争が続いた。その論争に結着をつけたのは考古学である。昭和14年、法隆寺の子院である実相院・普門院の地を発掘調査した石田茂作は、飛鳥時代の四天王寺式伽藍を発見、法隆寺には、西伽藍のほかにももう一つ寺があることを明らかにした。石田は、この寺を若草伽藍と呼び、聖徳太子が建立した斑鳩寺であると考えた。また、出土した瓦が二次的に火を受けていることや、塔跡の周辺に焼土が見られることから、天智9年に消失した法隆

たり、山のアケビや藤のツルを使った工芸品・編み物・人形・折り紙・菊や鉢植えの花・如て育てた野菜・写経などさまざまなものが展示されている。会場入り口の県道沿いには、開催の数週間前から屋根付きの手作り掲示板に文化展の案内が貼られ、竹製の花びんまで添えられ、かわいいた野の花が生けられていた。さらに、当日玄閣には、近くの川原の石が川をイメージした布の上に並び、A子さんが種から育てたという葉ボタン・パンジーの寄せ植えが飾られていた。以前にはフルート演奏や日本舞踊のアトラクションもあったそうだ。

顔見知りの方や高齢の方々がいろいろな特技や才能を持っていてことに驚いたり感心させられたりした。年々盛んになり、この地に定着しつつある文化展は、実行委員のきめ細かい準備やご苦労のお陰もあり、作品の発表の場と共に異世代の交流の場となっていることに明るい未来を感じた。（会員）



寺は斑鳩寺(若草伽藍)であると結論した。その結果、長年続いた法隆寺の再建・非再建論争は結着した。

それから30年ほどたった昭和43・44年に、文化庁は、奈良国立文化財研究所などの協力のもと、石田茂作博士を顧問として再度若草伽藍跡の発掘調査を行った。その調査報告書が、40年近く経過した平成19年3月に刊行された。報告書での分析によると、出土した瓦はいずれも二次的な火災を受けていないこと、塔跡周辺の焼土や炭水化物も確認されなかったなど、若草伽藍が焼失した痕跡を裏付ける考古学的な証拠は、検出されなかったとは、史実を伝えているのか、それとも編纂上ならんかの意図があったのかを含めた検討が必要になってきた。

## 2 聖徳太子の光と影

聖徳太子(574・622)は、用明天皇の息子として生まれ、本名を厩戸王と呼ぶ。推古天皇の摂政となり、憲

法十七条を制定して内政を整え、対外的には遣隋使を派遣して大陸文化の受容に積極的につとめた。また、思想的には仏教に帰依し、斑鳩の地に斑鳩宮と斑鳩寺(若草伽藍)を造営、交通上の拠点である難波には四天王寺を建立した。その

うした国家改革の理想は、やがて中大兄皇子や中臣鎌足らに継承され、大化の改新によって結実することになる。

生まれながら豊かな教養と優れた才能をもち、思想的には仏教を深いところで理解して聖徳太子は、推古天皇の摂政として国政を指導し、選れていた日本の社会に仏教を中心とした高度な文明をもたらしたというのである。

しかし、歴史研究が進み、これまで太子の事績と考えられてきた事柄を検証すると、太子とは直接結びつかない内容が多くあらわれてきた。例えば、憲法十七条について、江戸時代後期の考証学者狩谷棧齋は、これを聖徳太子の作ではないと断じている。また、昭和初期の著名な古代史学者の津田左右吉博士は、憲法十七条の文章は奈良時代になってから、『日本書紀』の編者が太子の名を借りて、官僚を育成するための訓戒として作成したと結論している。

また、太子の実在性を示す有力な根拠となった天寿国繍帳について、国文学者の金沢英之氏は、ここで使用された暦法を分析し、日本では持統天皇四年(690)に採用された暦であることを明らかにした。さらに80年を経たことである。さらに皇太子の称号そのものも、天皇の崩御後の後継争いを断つため、7世紀の終わり頃に制度化されたと言界では考えられている。従って、聖徳太子の時代には、皇太子の制度そのものが存在しなかったのである。

## おわりに

聖徳太子の名が最初に登場する書物は、日本最初の歴史書である『日本書紀』である。この歴史書が完成したのは、養老四年(720)であるから、太子の死後、丁度100年後にあたる。その間、信頼できる史料の中で、太子に関する記述は見当たらないので、聖徳太子は『日本書紀』の中で誕生したといえよう。

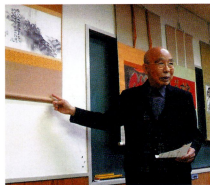
冒頭に触れたように、天智9年(670)、法隆寺に落雷があり、一層もなく焼けたといい、670年

には、まだ法隆寺(西院伽藍)は造営されていないので、『日本書紀』で焼失したと記述された法隆寺は、厩戸王が建立した斑鳩寺(若草伽藍)を指しているのであらう。しかし、考古学は、斑鳩寺が焼失しなかった事実を明らかにした。厩戸王の一族である上宮王家は、643年、蘇我入鹿に襲われ、斑鳩宮とともに滅亡した。『日本書紀』は、滅亡した上宮王家と斑鳩宮のうえに新たなスーパースターである聖徳太子を誕生させるのである。後世の政治家は、法隆寺(西院伽藍)を聖徳太子が建てた寺とするため、『日本書紀』の中で斑鳩寺を焼失させ、抹殺したのであろうか。(全員)



## 平成24年度

## 総会講演会



総会終了後の講演会は、「本物の世界」と題して、青梅市在住の清水保夫氏のお話を伺った。清水氏は、飯能市原市場の出身で、故小島善太郎画伯に師事し、青梅市立小島善太郎美術館設立に参加、青梅美術協会元会長、世界90数か国をスケッチ旅行し作画活動を続けています。当日は、川合玉堂と清水比庵の作品を展示し、両者の精神性について解説されたいいただきました。

## 飯能郷土史研究会の活動

## ◎平成二十四年度事業報告

## ▽総会 四月二一日(土)

講演会「本物の世界―玉堂と比庵」  
講師 清水保夫氏  
(青梅美術協会元会長)

▽例会  
六月十六日(土)

## ▽例会

「近代兵法と飯能戦争」  
講師 佐山二郎氏  
(火砲・軍事技術史研究者)

八月二十四日(金)  
県外研修会  
「筑波山周辺の史跡探訪」  
井坂敦実氏

十月  
「飯能の山岳信仰」  
郷土館事業に協賛  
十一月十五日(土)  
「山岳信仰と修験道」  
講師 大野邦弘氏  
(副会長)

平成二十五年三月十六日(土)  
「聖徳太子伝説と法隆寺」  
講師 須田 勉氏  
(国士舘大学教授・会員)

三月三十一日  
郷土はんのう三十三号発行

## ◎平成二十五年度事業計画

## ▽総会 四月二十日(土)

講演会「飯能の天文暦学と和算家」  
―千葉歳胤と石井和儀―  
講師 山口正義氏  
(郷土史研究者・羽村市在住)

▽例会  
六月二十二日(土)

## ▽例会

「高麗横丁とお諏訪さま」  
講師 清水澄一氏  
(理事)

八月二十三日(金)  
県内研修会  
「美里町の文化財巡り」  
田中 憐氏  
(郷土史研究・石仏協会理事)

十月  
「飯能の災害史」  
郷土館事業に協賛  
十二月十四日(土)

平成二十六年二月十五日(土)  
定例会  
平成二十六年三月三十一日  
郷土はんのう三十四号

新会員 深水孝子氏(飯能市長沢)  
今福孝夫氏(飯能市中山)

## 編集後記

待ちどおしかった春が急速にやってきました。各地の桜もせかされるように開花、お花見の予想は番狂わせの平成25年春です。

郷土はんのう33号は定例会でのご発表を記録する形で各氏に執筆して頂きました。4月総会の清水氏(写真)、6月の佐山氏の飯能在住の軍事史研究者として著明な方、日頃知り得ない砲術の歴史と解説を頂きました(別添)。8月はつくば市の県外研修。関根氏の報告文をお読み頂くこと歴史の深いつくば山周辺がよくわかります。12月の山岳信仰と修験は竹寺副住職の大野氏。2月は異色のテーマ「聖徳太子伝説と法隆寺」を考古学者の須田氏に執筆して頂きました。随筆は地域情報として南川在住の吉田さんが発表されています。「郷土はんのう」をご活用いただけます。(坂口和子)

郷土はんのう 第三十三号  
発行日 平成二十五年三月三十一日  
発行所 飯能郷土史研究会  
〒357-0034 埼玉県飯能市東町三二一六  
(堀越一方)  
電話九七三二一三三八  
題字 大野邦弘  
印刷所 (有)ビイ・ユースフル